専念寺通信

一月号（NO．８９）

あけましておめでとうございます。平成２０年はどのような年になるのでしょうか。私たちの地球は、世界は、この国は、そして私たちの日々の暮らしは、どのようにかわって行くのでしょうか。新しい年がみなさまにとってより良い年でありますよう、お祈り申し上げます。

☆法然上人のことば

一年のはじめに、法然上人のいくつかの言葉をご紹介します。

かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん。
ここに我らごときはすでに戒定慧（かいじょうえ）の三
学の器（うつわ）にあらず　　『行状絵図第五』

厳しい戒律をまもることもできず、心を鎮めて思いをこらすこと（定）もできず、そして智慧のない自分のようなものは、いったいどうすればよいのか、という嘆きです。１５歳で大受戒を授けられ、源光、皇円、叡空の三人から１１年にわたり教えを乞い、諸宗を歴訪、ふたたび比叡山の黒谷にもどり、学問を続けたみずからを法然上人は「智慧のない者」とよんでいます。

我が末法の時の中の億々の衆生（しゅじょう）、行（ぎょう）
を起こし道を修せんに、いまだ一人として得る者あらじ
『大集月蔵経』

法然は、源平の争乱や飢餓に苦しむひとの多い当時を、末世の時代と位置づけ、さまざまな行を起こしながらもそれを会得できた人は存在しない、とし、末世の救いとは何かと問います。

衆生、行を起して、口に常に仏を称すれば、仏即ちこれを聞こしめす。
身に常に仏を礼敬（らいぎょう）すれば、仏即ちこれを見たまう。
心に常に仏を念ずれば、仏即ちこれを知りたまう。衆生、仏を
憶念（おくねん）すれば、仏、衆生を憶念したまう。

常に仏を思い、念じ、みずからの無力さを自覚し、祈念し続けることで仏は、無学な煩悩に満ちた我々のような存在を救って下さるとしたのです。

もし衆生ありて、かのくににうまれんと願ずるものは、三種の心を起してすなわち往生すべし。一には至誠心、二には深心、三には廻向発願心也。三心を具するものは、かならずかのくにに生まるといえり。
『浄土宗略抄』

これらの法然上人の言葉は古びたものとは思えません。現代の私たちが失いがちな心のありかたを説いている点で、いまなお、深い意味のある言葉といえるでしょう。

平成２０年１月１日
大黒